

## 〔教育実践研究〕

## 口腔ケア体験型学習による学生の学び

平岡 葉子 北村 直子 古川 直美 奥村 美奈子

## What Students Have Learned through Experiential Learning of Oral Care

Youko Hiraoka, Naoko Kitamura, Naomi Furukawa, and Minako Okumura

## I. はじめに

成熟期看護学領域では、領域別実習直前の2年次後期セメスターに、「さまざまな健康障害をもつ成熟期の人とその家族が、健康を維持し、また、健康障害に適応・健康障害から回復して社会的復帰や自立・自律した生活をおくるために関連のある看護技術を中心に、基本的な援助方法を演習を通じて学習する」ことを目的として、看護技術演習を実施している。

3年次の領域別実習では、学生の受け持つ対象は高齢者が多く、加齢や疾患に伴う口腔機能低下に対する看護ケア、咀嚼嚥下機能や言語機能の維持と回復のための看護ケアが必要である。さらに近年の傾向として、口腔ケアは高齢者に多い誤嚥性肺炎をはじめとする感染予防、齲歯予防の観点から重要な役割を担うとされている。それらを踏まえ、成熟期看護学領域における演習項目を教員間で検討し、平成19年度から口腔ケアを体験型学習の方法で演習に取り入れることとなった。

口腔ケアを演習で実施するにあたり、看護職者の援助のみを体験したり、モデル人形を用いて行うのではなく、援助を受ける側も学生自身が体験する形を選択した。これは、看護職者としての姿勢や対象者とのコミュニケーションなど看護ケアの基盤を思考し、患者の状態を捉えて援助する大切さを知ることが意図している。そこで、本研究では、初めて取り組んだ口腔ケア体験型学習（以下、本演習とする）における学生の学びを明らかにし、口腔ケア演習の内容及び方法について評価・検討することを目的とする。

## II. 本演習の位置づけと概要

本演習は、成熟期看護技術演習で行う計6の演習項目の中の1つとして位置づけられている。他の演習項目は「気道クリーニング」「心肺脳蘇生」「心電図」「関節可動域測定」「自動・他動運動」である。本演習の目標は、「口腔の機能を理解し、口腔ケアの目的と適応を理解する」「口腔ケアの基本的技術を習得する」の2つである。

本演習に臨むための事前学習課題として、成熟期看護技術演習で使用する資料の本演習部分の熟読と、歯垢の自己チェックを1回実施することを課した。歯垢の自己チェックは、歯垢の蓄積状況をアセスメントする方法を知り、どのようにブラッシングすれば歯垢が除去されるのかを各自で体験することを意図している。学生は、食後に普段どおりの歯磨きを行った後、配布した歯垢染色スティックを歯に塗布し、歯垢染め出し法を行った。磨き残された歯垢が歯垢染色スティックにより赤く染色されるため、学生はその場所をデンタルミラーで確認し、オレリーのプラークコントロールレコード（PCR）を用いて記入した。その後、各自で染色された全ての歯垢が除去できるまで、ブラッシングを行うこととした。

本演習は、78名の学生を1グループ約20名ずつのグループに分け、3名の教員が担当した。本演習の流れは図1に示すように、口腔ケアの講義とデモンストレーション、体験型学習、口腔ケアモデルを用いた義歯の着脱・洗浄で構成されている。はじめに教員が20分間で口腔ケアの定義、口腔機能とは何か、加齢や疾患による口腔機能の変化、口腔ケアの方法など習得してほしい基

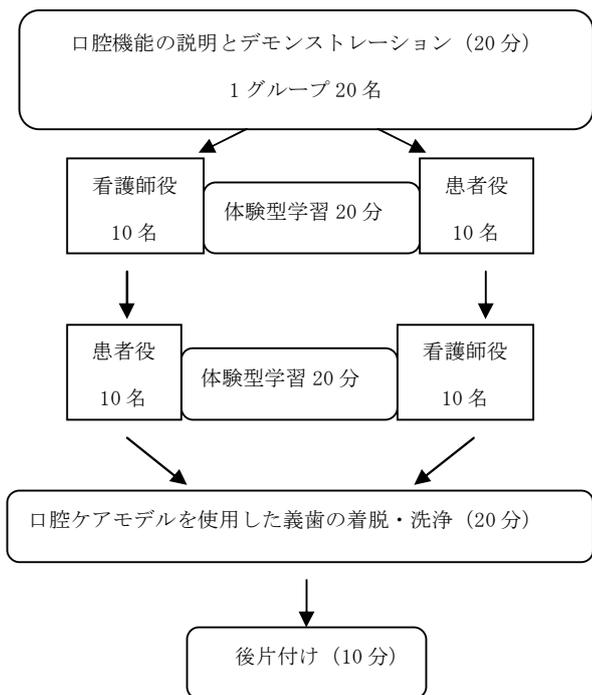


図1 本演習の流れ

本的技術について資料を用いて説明し、口腔ケア用具(スポンジブラシ、舌ブラシ、デントエラック®)については実物を提示して使用方法や特徴、どういった患者に適應するかを説明した。その後、教員2名で看護師役と患者役を演じて口腔ケア援助場面の体験型学習(用具の準備、ブラッシング、含嗽、後片付け)のデモンストレーションを行った。患者役の設定は、患者の病態や嚥下に対する配慮ができることを意図して、発症早期の脳梗塞で完全右側麻痺があり、ベッドのギャッジアップは30°までに制限されている状態とした。本演習は40分間とし、学生は2名1組となり、看護師役と患者役を交代しながら行った。学生は、演習直前の食後は歯磨きを実施せずに演習に参加した。看護師役の学生は、用具の準備、歯垢染色スティックで染色した患者役の学生の口腔清拭(多種類のスポンジブラシを用いる)とブラッシング、含嗽介助、後片付けまでを行った。教員3名は、学生同士の体験型学習中に適宜学生の手技や声かけを確認し、また学生からの質問に対応した。

本演習後のレポートは、看護師役と患者役を演じて行った体験型学習部分に焦点をあてた内容で、「口腔ケアの看護師役を通じて学んだことを書いてください」「口腔ケアの患者役を通じて学んだことを書いてください」

という2つの問いに対し、合わせてA4版1枚の自由記載を求め、本演習から4～5日後に提出することとした。

### III. 研究方法

#### 1. 分析対象

本演習が終了した後、学生が提出した演習後レポートで、かつ研究承諾の得られた2年次生76名の演習後レポートの記述内容である。

#### 2. 分析方法

演習後レポートの記述を1意味1記述として、意味内容の類似性に沿って整理し、分類、命名した。記述内容の意図解釈から分類・命名における全ての過程において、研究者間で合意が得られるまで繰り返し検討を行った。

#### 3. 倫理的配慮

本研究の趣旨・匿名性の保障について、本演習が含まれる科目の成績が出された後に口頭と文書で学生に説明し、承諾書をもって同意を得た。また、本研究は本学の研究倫理審査部会での承認が得られている。

### IV. 結果

#### 1. 学生の学びの記述数と分類

記述総数は看護師役で376記述、患者役で351記述であった。分析の結果、看護師役からは62小分類(本文中で〈 〉と示す)が得られ、さらに意味内容の類似性に従い21中分類(本文中で《 》と示す)に、最終的に【口腔ケアの難しさ】【アセスメントの重要性】【口腔ケア用具の理解と選択の重要性】【口腔ケアの方法】【声かけや説明することの重要性】【心地よくケアを受けられるよう配慮することの重要性】【口腔ケア手技習得の重要性】【口腔ケアの大切さ】からなる8大分類(本文中で【 】と示す)が抽出され、それを示したものが表1である。

患者役からは54小分類が得られ、さらに意味内容の類似性に従い13中分類に、最終的に【口腔ケアの難しさ】【アセスメントの重要性】【口腔ケア用具の実感と選択の重要性】【口腔ケアの方法】【声かけや説明することの重要性】【心地よくケアを受けられるよう配慮することの重要性】【知識と技術の習得の必要性】【残存機能活用の重要性】からなる8大分類が抽出され、それを示した

ものが表2である。

## 2. 学生の看護師役及び患者役を通じた学びの内容

### 1) 【口腔ケアの難しさ】

看護師役の【口腔ケアの難しさ】からは、《口腔ケアを介助することの難しさ》として〈人の歯を磨くことの難しさ〉〈ブラッシングの力加減の難しさ〉など、《口腔ケアの気づき》として〈磨きにくい部分への気づき〉があった。

患者役の【口腔ケアの難しさ】からは、《含嗽の難しさ》として〈含嗽の水を出すことの難しさ〉〈臥位での含嗽の難しさ〉等があった。

### 2) 【アセスメントの重要性】

本分類は、看護師役と患者役ともに見られたものであり、看護師役では《アセスメントの重要性》として〈麻痺による患者の能力やリスクをアセスメントする〉〈患者の状態をアセスメントする〉等、《感染予防の視点をもつ重要性》として〈清潔を保つことの重要性〉〈感染防止策をとることの重要性〉、《汚れが残りやすい部分の理解》として〈汚れが残りやすい部分の理解〉〈汚れが残りやすい部分を事前に理解しておくことの重要性〉があった。

患者役では、《アセスメントの重要性》として〈口腔内を観察してきちんとケアすることの重要性〉があった。

### 3) 【口腔ケア用具の理解と選択の重要性】及び【口腔ケア用具の実感と選択の重要性】

看護師役の【口腔ケア用具の理解と選択の重要性】からは、《用具を理解する》として〈用具の特徴の理解〉〈用具に関する知識を持つ重要性〉、《患者に合わせた用具の選択の重要性》として〈用具の特徴を理解し、患者に適したものを選択する重要性〉〈よりよい用具の検討〉があった。

患者役の【口腔ケア用具の実感と選択の重要性】からは、《用具の不快感と効果の実感》として〈スポンジブラシの不快感〉〈使用感の違い〉等、《患者に合わせた用具選択の重要性》として〈患者の口腔内状態に合わせた適正な用具の選択〉〈患者の意向を取り入れた用具の選択〉があった。

### 4) 【口腔ケアの方法】

本分類は、看護師役と患者役ともに見られたものであり、看護師役では《口腔ケア方法の理解》として〈ブラッ

シング方法の理解〉〈含嗽方法の理解〉等、《口腔ケアの準備の重要性》として〈事前に手順や環境を考え準備する〉、《患者の状態に合わせた方法の理解》として〈患者の障害に合わせた方法の重要性〉〈患者個々に合わせた方法の理解〉等、《口腔ケアに伴うリスクの理解》として〈口腔粘膜を傷つけない注意の必要性〉〈障害に合わせた方法の理解〉等があった。

患者役では《口腔ケア方法の理解》として〈含嗽・ブラッシングに伴う水滴の不快感をすばやくふき取ることの重要性〉〈対象の負担を考え、すばやくケアすることの重要性〉等、《麻痺患者への口腔ケア方法の理解》として〈麻痺患者の含嗽方法の検討〉〈誤嚥への注意の必要性〉、《患者の視点から考えてケアを行うことの大切さ》として〈患者に合わせた安全・安楽な体位〉〈口腔ケアを受ける患者の気持ちの理解〉等があった。

### 5) 【声かけや説明することの重要性】

本分類は、看護師役と患者役ともに見られたものであり、看護師役では《反応を確認する重要性》として〈ブラッシングの力加減を患者に確認する〉〈患者に異変がないかを確認する〉等、《声かけや説明を行う重要性》として〈声をかけながら実施する〉〈口腔ケアの必要性や目的を説明する〉等があった。

患者役では《声かけや説明を行う重要性》として〈ケアする際に声かけや説明をすることの重要性〉〈患者に力加減がどうか声かけしながらケアする〉等があった。

### 6) 【心地よくケアを受けられるよう配慮することの重要性】

本分類は、看護師役と患者役ともに見られたものであり、看護師役では《不快や負担に配慮することの重要性》として〈患者の負担を考慮した方法を検討する重要性〉〈不快を与えない手技の理解〉、《羞恥心や自尊心に配慮することの重要性》として〈羞恥心に配慮することの重要性〉〈麻痺患者の自尊心を尊重してケアする〉、《不安や威圧感を与えないよう配慮することの重要性》として〈不安感を持たせないようケアする〉〈患者に威圧感を与えない看護者の体勢〉、《心地よさ・意向に配慮することの重要性》として〈好み・意向を考慮した方法〉〈患者の心地よさに配慮してケアする〉、《患者との関係構築の重要性》として〈患者が思っていることを伝えられる関係性の構築〉、《関わる際の注意点》として〈看護者が

表1 学生の学び—看護師役を通じて—

大分類	中分類	小分類	記述数	
口腔ケアの難しさ	口腔ケアを介助することの難しさ	含嗽の水を含ませることの難しさ	2	
		磨き残しの確認の難しさ	4	
		開口してもらうことの難しさ	4	
		人の歯を磨くことの難しさ	20	
		ブラッシングの力加減の難しさ	17	
		患者の気持ちを考えながらケアすることの難しさ	1	
		歯並びにあわせた用具選択の難しさ	1	
		手際よくケアを進めることの難しさ	1	
		麻痺のある患者の口腔ケアの難しさ	1	
		口腔ケアの気づき	磨きにくい部分への気づき	8
アセスメントの重要性	アセスメントの重要性	口腔内をアセスメントする	2	
		患者の状態をアセスメントする	2	
		麻痺による患者の能力やリスクをアセスメントする	5	
		感染予防の視点をもつ重要性	9	
		清潔を保つことの重要性	3	
口腔ケア用具の理解と選択の重要性	用具を理解する	汚れが残りやすい部分の理解	12	
		汚れが残りやすい部分を事前に理解しておくことの重要性	3	
口腔ケアの方法	患者に合わせた用具の選択の重要性	用具の特徴の理解	32	
		用具に関する知識を持つ重要性	2	
		用具の特徴を理解し、患者に適したものを選択する重要性	18	
		よりよい用具の検討	3	
		ブラッシング方法の理解	40	
		磨き残しをデンタルミラーで確認する	2	
		含嗽方法の理解	16	
		唾液を除去する配慮の必要性の気づき	2	
		頬内側のケア方法	3	
		口腔ケア後の整容	1	
口腔ケアの方法	患者の状態に合わせた方法の理解	口腔ケアを実施する時の体位や姿勢	4	
		麻痺患者の口腔ケアの方法の理解	12	
		患者の状態に合わせたケアの大切さ	3	
		ケアによるリスクを予防することの大切さ	4	
		口腔ケアの準備の重要性	事前に手順や環境を考え準備する	7
		患者個々に合わせた方法の理解	8	
		患者の状態に合わせた体位の検討	6	
		口腔粘膜の状態に合わせた方法をとる	3	
		患者の口腔ケアに関するセルフケア能力を考える	3	
		患者の障害に合わせた方法の重要性	9	
口腔ケアに伴うリスクの理解	患者の状態に合わせた方法の理解	口腔粘膜を傷つけない注意の必要性	4	
		誤嚥のリスクの理解	1	
		障害に合わせた方法の理解	3	
		ブラッシングの力加減を患者に確認する	8	
		患者に異変がないかを確認する	5	
声かけや説明することの重要性	声かけや説明を行う重要性	患者の反応を捉えて含嗽する	4	
		対象に合わせ、分かりやすく説明する	4	
		口腔ケアの必要性や目的を説明する	4	
		ケアの必要性を説明し、同意・納得を得てケアする	3	
		声をかけながら実施する	16	
心地よくケアを受けられるよう配慮することの重要性	不快や負担に配慮することの重要性	患者の好みに合わせられるように声をかける	2	
		これから行うことを説明する	3	
		不快を与えない手技の理解	7	
		患者の負担を考慮した方法を検討する重要性	8	
		羞恥心や自尊心に配慮することの重要性	4	
		麻痺患者の自尊心を尊重してケアする	1	
		不安や威圧感を与えないよう配慮することの重要性	不安感を持たせないようケアする	1
患者に威圧感を与えない看護者の体勢	1			
口腔ケア手技習得の重要性	心地よさ・意向に配慮することの重要性	患者が思っていることを伝えられる関係性の構築	3	
		好み・意向を考慮した方法	5	
		患者の心地よさに配慮してケアする	3	
		関わる際の注意点	1	
		看護者が気をつけること	1	
口腔ケアの大切さ	口腔ケアの大切さ	手技を習得しておくことの重要性	5	
		口腔ケアの大切さの理解	5	
		口腔ケアの効果の理解	2	

表2 学生の学び—患者役を通じて—

大分類	中分類	小分類	記述数		
口腔ケアの難しさ	含嗽の難しさ	臥位での含嗽の難しさ	8		
		含嗽の水を出すことの難しさ	14		
		水の量による含嗽の難しさ	2		
		麻痺患者の含嗽の難しさ	6		
アセスメントの重要性	アセスメントの重要性	口腔内を観察してきちんとケアすることの重要性	2		
		舌ケアによる気持ち悪さ	2		
口腔ケア用具の実感と選択の重要性	用具の不快感と効果の実感	スポンジブラシの不快感	7		
		歯ブラシの効果の実感	3		
		使用感の違い	7		
		用具の効果的な使用	4		
		舌ブラシの効果の実感	4		
	患者に合わせた用具選択の重要性	患者の意向を取り入れた用具の選択	3		
		患者の口腔内状態に合わせた適正な用具の選択	7		
		痛み・損傷を伴わないブラッシングの力加減の重要性	9		
		汚れを取るためにある程度の力が必要であること	3		
		対象の負担を考え、すばやくケアすることの重要性	14		
口腔ケアの方法	口腔ケア方法の理解	正しい手順で行うことの大切さ	4		
		含嗽がうまくできるようにガーグルベースンをしっかり当てること	14		
		含嗽を適宜行うことの必要性	7		
		含嗽方法の気づき	2		
		含嗽・ブラッシングに伴う水滴の不快感をすばやくふき取ることの重要性	18		
		舌ケアにおける清潔と不快を検討する必要性	3		
		麻痺患者への口腔ケア方法の理解	10		
	患者の視点から考えてケアを行うことの大切さ	誤嚥への注意の必要性	7		
		患者に合わせた安全・安楽な体位	17		
		患者の視点に立った看護の大切さ	8		
		口腔ケアを受ける患者の気持ちの理解	9		
		磨き残しへの不安	2		
		安心感を与える立ち位置	1		
		患者に合わせた手技をとることの重要性	2		
声かけや説明することの重要性	声かけや説明を行う重要性	ケア中の患者の反応や様子を捉えてケアすること	9		
		ケア後に気になるところを確認する	1		
		ケアする際に声かけや説明をすることの重要性	36		
		ケアの必要性を説明し、同意・納得を得てケアする	2		
		患者に力加減がどうか声かけしながらケアする	8		
		舌ブラシを使用する際の声かけの必要性	4		
		分かりやすい言葉を使って説明する	1		
		患者が意向を伝えられるような看護師との関係性	2		
		心地よくケアを受けられるよう配慮することの重要性	口腔ケアを受ける患者の気持ちの理解	ブラッシング時の力加減に伴う不快感	5
				手袋の不快感	1
きちんとガーグルベースンに含嗽した水を吐き出せるか不安	9				
臥位のまま水を含むことへの心配	1				
含嗽の抵抗感	2				
羞恥心やプライバシーへの配慮の大切さ	含嗽をこまめにしないと不快であること		5		
	含嗽の水の量をきちんと考える		3		
	口腔内を見られることの羞恥心		13		
	口腔ケアに伴う羞恥心を看護師は配慮してケアを行う		21		
	他者にケアされることへの配慮		5		
爽快感や清潔感を得るための配慮	患者にとって口腔ケアによる爽快感を得ることの大切さ	14			
	清潔感を得るための配慮	2			
	口腔ケアで清潔になったことを実感できるケアの必要性	2			
知識と技術の習得の必要性	口腔ケアにおける知識と技術の必要性	口腔内を清潔にするための知識・技術の必要性	3		
		形態と機能の学習の必要性	1		
残存機能活用の重要性	患者のもつ力をケアに生かす	患者のもつ力をケアに生かす	2		

気をつけること〉があった。

患者役では《口腔ケアを受ける患者の気持ちの理解》として〈きちんとガーグルベースンに含嗽した水を吐き出せるか不安〉〈ブラッシング時の力加減に伴う不快感〉等、《羞恥心やプライバシーへの配慮の大切さ》として〈口腔ケアに伴う羞恥心を看護師は配慮してケアを行う〉〈口腔内を見られることの羞恥心〉等、《爽快感や清潔感を得るための配慮》として〈患者にとって口腔ケアによる爽快感を得ることの大切さ〉〈清潔感を得るための配慮〉等があった。

#### 7) 【口腔ケア手技習得の重要性】及び【知識と技術の習得の必要性】

看護師役の【口腔ケア手技習得の重要性】からは、《手技を習得しておくことの重要性》として〈手技を習得しておくことの重要性〉があった。

患者役の【知識と技術の習得の必要性】からは、《口腔ケアにおける知識と技術の必要性》として〈口腔内を清潔にするための知識・技術の必要性〉〈形態と機能の学習の必要性〉があった。

#### 8) 【口腔ケアの大切さ】

本分類は、看護師役のみに見られたものであり、《口腔ケアの大切さ》として〈口腔ケアの大切さの理解〉〈口腔ケアの効果の理解〉があった。

#### 9) 【残存機能活用の重要性】

本分類は、患者役のみに見られたものであり、《患者のもつ力をケアに生かす》として〈患者のもつ力をケアに生かす〉があった。

## V. 考察

### 1. 本演習における学生の学び

#### 1) 看護師役の体験による学び

看護師役の体験で、学生は単に口腔ケアの知識や手技だけを学ぶのではなく、様々な学びを得ていた。特に【口腔ケアの方法】【アセスメントの重要性】【声かけや説明することの重要性】【心地よくケアを受けられるよう配慮することの重要性】【口腔ケア手技習得の重要性】の学びは、平山ら<sup>1)</sup>が挙げている、看護基本技術を行う際にその行為を支える看護者としての態度や行為の構成要素の一部である、知識と判断、実施と評価、対象者への説明、安全・安楽確保、プライバシーの保護、個別性

への応用の要素が含まれるものであった。このことより、看護職者としての姿勢や対象者とのコミュニケーションなど、看護ケアの基盤を学ぶという本演習のねらいは達成できたのではないかと考える。

中分類では、《口腔ケア方法の理解》の記述数が多かったが、《口腔ケアを介助することの難しさ》や《声かけや説明を行う重要性》の記述も多かった。学生は、今まで体験したことのない他者への口腔ケアに不安や困難を感じながらも、患者役の学生の様々な反応を捉え、自ら行うケアに関する適切な説明や、ケア中の患者役の気分を気遣う必要性を感じたと考えられる。特に、患者役の学生が不快や負担、不安などの反応や表情をみせた場合は、看護師役の学生にとって、自己の口腔ケア技術や接し方を振り返り、患者にあった声かけや方法を見出すきっかけとなったのではないかと考えられる。

#### 2) 患者役の体験による学び

最も記述数が多かったのは【口腔ケアの方法】であり、その中でも《口腔ケア方法の理解》の記述が多かったのは、看護師役の体験と同様であった。このことから、基本的技術の習得という本演習のねらいの一部でもある、口腔ケアの方法についての理解は得られたと言える。【口腔ケアの方法】の中の、《患者の視点から考えてケアを行うことの大切さ》の記述も多かった。学生は、自己の患者体験からケアを受ける側の気持ちを実感することで、看護師役として行う際に留意すべき注意点や方法を主体的に学ぶことができたと考えられる。しかし、教員が患者役として設定した麻痺患者に特化した《麻痺患者への口腔ケア方法の理解》の記述数は少数であった。これは、2年次後期の段階にあるため、麻痺患者に接する機会が少なく、イメージし難かったのかもしれない。一方で少数ではあるが、【残存機能活用の重要性】の記述があり、患者の残っている力を看護師が専門性をもって見極め、全てにおいて看護師が行うのではなく、対象の力を十分に引き出し、発揮できるよう共にケアを行っていく重要性について学んだ学生もいた。さらに多くの学生が対象の状態を理解し、こういった患者の気持ちを自分の立場に置き換えて考えられるような演習となるよう、意識的にかかわることが重要であろう。

また、【心地よくケアを受けられるよう配慮することの重要性】や【声かけや説明することの重要性】につい

ての記述も多かった。学生は、麻痺があり他者にケアを受けなければいけない対象の心理や、含嗽後の口腔内容を吐き出すなど、プライバシーに配慮が必要な場面を幾つも体験した。それにより、口腔ケアによるプラス面だけではなく、患者は他者の力を借りなければいけない状況に直面し、不快や不満、不安を感じる可能性があるということに思いを巡らせることができていた。そこでさらに、学生は、口腔ケアを受ける際に看護師役の学生から次の動作の説明や体調や気分を気遣う声かけがあることで安心が得られ、ケアを受ける必要性や期待される状態などについての説明やケアに対する同意や納得することを体験できていたといえる。

## 2. 今後の課題

今回実施した学生同士で患者役と看護師役を演じる体験型学習は、教員による講義やデモンストレーション、モデル人形へのケアの実施だけでは感じ取ることが出来ない難しさや羞恥心、苦痛、爽快感などを実感するのに有効であったと考えられる。しかし、看護師役と患者役両者とも麻痺のある患者に特化したケア方法やかかわりの学びに言及した記述が少なかった。これは、患者役として設定した発症早期の脳梗塞患者が、2年次学生にとって十分にイメージできず、さらにこのような患者と接する機会も少ない現状が背景にある。そのため、麻痺のある状態が十分イメージできない学生が患者役を行うことや、目の前の手技に追われてしまい、麻痺について十分に配慮したケアに至らない状況が考えられる。このことから、患者役の特徴を生かした演習としては限界がある。今後の課題として、患者役の設定を学生がより具体的にイメージできるよう、本演習を行う前に脳梗塞の患者の状態をイメージできる視聴覚教材等を活用することや、デモンストレーション方法の工夫が必要であろう。また、どのようにすればリアリティーを出せるかについても教員間で検討し、デモンストレーションの内容や本演習の構成を見直していくことが求められる。

さらに、本演習は領域別実習直前に学内で行う演習の一つとして、2年次後期 Semester までの講義で得た既存の知識を統合して行う重要な演習である。だからこそ、患者との接し方を身に付け、些細な反応や表情を読み取り、さらに看護職者として専門的な判断を行い、根拠あるケアにつなげることの重要性を、学生が意識できる演

習にしたい。津田ら<sup>3)</sup>が、学生が患者の認識と表現に迫りつつ、看護職者としての判断とケアにつなげる上で、「学生が患者と看護師の互いの立場を往復させる」ことを重視しているように、学生が、看護師役で手技に集中するあまり見逃された患者役の学生の反応や、看護師役の学生自身が気づかない何気ないかわりの一部に対し、教員が具現化してフィードバックしていくことを適時的に行える体制を検討し、本演習の指導を強化させていくことが必要である。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、趣旨を理解し、レポートの使用を承諾して下さった2年次学生の皆さんに感謝いたします。

## 文献

- 1) 看護学教育の在り方に関する検討会 報告：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて、2002.
- 2) 兼松恵子, 田中克子, 原 敦子：成熟期看護技術演習におけるストーマ装具体験を通じて学生が捉えた学び, 岐阜県立看護大学紀要, 5(1); 71-77, 2005.
- 3) 津田智子, 中野榮子, 永嶋由理子, 他：口腔ケアの学内演習における学生の認識の特徴－学生が記述したプロセスレコードの分析を通して－, 福岡県立大学看護学部紀要, 5(2); 43-51, 2008.
- 4) 鯉坂由紀, 加藤真由美：高齢者の口腔ケア演習方法の検討－模擬体験による患者理解と援助の気づき－, 第37回日本看護学会論文集 看護教育; 288-290, 2006.

(受稿日 平成20年11月10日)

(採用日 平成21年1月28日)